

The House in Lordship Lane  
1946  
by A.E.W.Mason

目次

ロードシップ・レーンの館

5

訳者あとがき 400

解説 横井 司 406

## 主要登場人物

- セプティマス・クロトル……………ダガーライン汽船の会長  
ジョージ・クロトル……………セプティマスの甥  
ジェームズ・クロトル……………セプティマスの甥  
ロザリンド・リート……………セプティマスの娘  
アラン・フリーデー……………ダガーライン汽船の弁護士  
ダニエル・ホーブリー……………英国国會議員  
オリヴィア・ホーブリー……………ダニエルの妻  
フィリップ・モーター……………もと近衛歩兵の大尉  
ブライアン・デヴィッシャー……………海で遭難した男  
ジュリアス・リカード……………引退した実業家  
モルトビー……………スコットランドヤード  
アノー……………ロンドン警視庁警視  
パリ警視庁警部

ロードシップ・レーンの館

## 第一章 ブルターニュのリカード氏

リカード氏は、とあるバーの外に置かれた鉄製のテーブルセットの席につき、コーヒーを口に運びながら、甘くて濃厚なリキュール、カルヴァドスを味わっていた。それでも、リカード氏はご機嫌だった。「だれも信じないだろうな」と軽く含み笑いをする。しかし、ここはフランスのブルターニュ、季節は夏だ。「ブルターニュで、ブラウニング（英国ウィクトリア時代の代表的詩人）をお供に、ぶらぶらしている」洒落た気分で頭韻を踏んでみる。「ここまでは順調だ、『ジエームズ・リーの妻』（前述ブラウニングの代表的詩集『登場人物』の一編）にも会っていないしな」リカード氏は一人きりだった。大きな荷物はエクサンプロヴァンスから自宅に発送済みで、スーツケース一つを積んだ立派な大型ロールスロイスと運転手がリカード氏を乗せてブルターニュ経由でシエルブルルへ向かっていた。シエルブルルからは海峡を渡る定期船に乗り、リカード氏の好みに合う方法でイギリスへ入れるはずだった。ところが、車の調子が悪くなり、故障してしまった。そのため、リカード氏は聞き慣れない名前のこの小さな町に、三日間の足止めをくらったのだ。とはいえ、乗る予定の定期船は四日後でなければ到着しない予定だったし——ここはブルターニュで、季節は夏だった。

さらに、このレザルドリユーの眠たげな小さな広場は、リカード氏の感興を強くそそった。リカード氏が座っている一段高くなったテラスのある広場は、三方に店や家々が並び、なにもない残り一方

の先は、砂土と灌木の切りたつた崖になつていて、レザルドリユー川の淵へ落ちこんでいる。まるでオペラの舞台のようだった。崖の下から、指揮者がこつこつと指揮棒を鳴らす合図の音が聞こえてきそう。広場をのんびりと横切っている、真っ赤なシャツを着たあの少年は、今にも歌いはじめるのではないか。ただ、その期待にこたえたとしても、空振りに終わったにちがいない。がっちりした中年女が大きな封筒を手に、よたよたとバーから出てきて、リカード氏のすぐそばまで来ていたのだ。

「旦那さん、うちのカフェーをレザルドリユーでの滞在場所だつて教えたのかい？」

「そういう電報は打つた」リカード氏は認めた。「まだ町に宿が見つかつていなかったのですね」

「じゃあ、たぶんこの手紙は旦那さん宛でしょうよ。イギリス人の紳士はもう一人いるけど——」

「モーダント大尉だな。たしかに。その淵の小さなヨットの持ち主だね。手紙を見せてくれないか。どっち宛か、わかるだろうから」

減多にない手紙なんて代物を間違つて渡してはならないと力が入るあまり、その女は手紙をしつかり胸に押しあてたままだつたのだ。表書きを見せられたリカード氏には、その筆跡に見覚えがあつた。「わたし宛だ」リカード氏は軽く声を弾ませた。渡し渋る女の手から手紙をひたたくつて、手で開封する。

書き出しはこうだった。

親愛なる友へ

招待を受けるのは気が咎めますが——

リカード氏は椅子にもたれ、寛大な気分で思い返した。「そうだ、あの男は決まってなにかを咎める。そういう性質なんだ——イギリスの貴族気どりの署名があるぞ、見なくてもわかる」リカード氏は手紙を裏返した。あった。『アノー』。ただ『アノー』だけ。恐るべき男の名前だ。

「やれやれ」リカード氏は独りごちた。おかしそうな笑みが、口の端に一瞬浮かぶ。

「だいたい、グロヴナー・スクエアで休暇を過ごさないかと、パリ警視庁のアノー警部を招いてから一年が経つ。アノーは一年前に招待を受け入れて、自分を咎めることができたはずだ。が、咎めなかった。後日咎めなくなるかもしれないと、その機会が来るまで保留しておいたのだ。そして、機会到来というわけだ。

「だけど、こっちは知らないぞ」リカード氏はむっとして言った。カフェーの女主人に顔を向ける。「マダム・ロラールだったね？」

「そうですよ、とマダムは答えた。そのくせ、リカード氏はマダム・ロラールのことを考えてはいなかった。困りものの手紙を、指関節で叩く。

「そんなことをしちやいけませんよ」

「そうかね？」

「そうです」

「わが家はホテルじゃないんだよ」

「そうなんですか？」

「とんでもない話だ」

リカード氏の悩みを見抜いたかのように、マダム・ロラールは頭を振った。その度に、体がゼリー

のようにぶるんぶるんと揺れた。

「検討してみなければ」リカード氏は腹立たしげに言った。

「そう、そう」マダムは答えた。「考えなけりやなりませんね、カルヴァドスが景気づけになるはずですって」そして、よたよたとバーへ戻っていった。

二杯目のカルヴァドスを飲みながら、リカード氏はアノーからの手紙の続きを読んだ。そのなかの一文が、リカード氏の苛立ちをきれいに消し去った。「休暇に合わせて、ちよつとした仕事があるのです。ささやかな難問を解決しなければならず、お力添えを願いたい」手紙はひらひらとリカード氏の膝に落ちた。大きく息を吸ったその顔は、十歳も若返ったようだった。ささやかな難問だって！ 経験がないとでも？ リカード氏は侮辱され、笑いものにされ、ひどい目に遭い、煙に巻かれて恥をかかされ、いいように使われるだろう。それでも、スリルと、興奮と、危険がある。人生は再びトルコ石からきらめくトパーズへと変わる。大胆不敵な犯罪者を運の尽きまで追い詰める手助けをするのだ。自分とアノー、いや、より正確には、アノーと自分が。

リカード氏は再度手紙に視線を落とした。そして、すぐに飛びあがった。アノーは英仏海峡を渡る蒸気船に乗り、明日にはドーバーに到着する。五時までにはロンドンに入り、五時半にはグロヴナー・スクエアに着くだろう。が、リカード氏はここ、レザルドリユーに取り残されている。大急ぎで郵便局へ駆けこみ、家政婦に電報を打った。自分が気分屋で、アノーと同じ航路を選んで旅を続けてささいしたら！ ルアーブルから真夜中に出る船はあるが、そこまでたどり着けまい。リカード氏は広場に戻ってきた。ああ、もう二日、あの鉄製のテーブルセットに座っていることなどできない。それに、ブルターニュにすっかり夢中になっていたせいで、最初は真実に目をつぶっていたが、正直なと

〔著者〕

A・E・W・メイスン

本名アルフレッド・エドワード・ウッドリー・メイスン。  
1865年、英国ロンドン生まれ。95年に処女作となる長篇小説  
A Romance of Wastdale を発表。1910年にフランス人のアノ  
ー警部を探偵役とする長編『薔薇荘にて』を刊行し、以降、  
『矢の家』(1924)や『オパールの囚人』(28)などのアノー探  
偵シリーズを含め、多くの作品を発表した。48年死去。

〔訳者〕

鬼頭玲子 (きとう・れいこ)

藤女子大学文学部英文学科卒業。インターカレッジ札幌在  
籍。札幌市在住。訳書に『アプビイズ・エンド』、『四十面  
相クリークの事件簿』、『ネロ・ウルフの事件簿 アーチー・  
グッドウィン少佐編』(いずれも論創社)など。

ロードシップ・レーン<sup>やかた</sup>の館

——論創海外ミステリ 208

---

2018年4月20日 初版第1刷印刷

2018年4月30日 初版第1刷発行

著者 A・E・W・メイスン

訳者 鬼頭玲子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1718-7

落丁・乱丁本はお取り替えいたします